

ピュタゴラス

日下部吉信

以下は古代から伝わるピュタゴラスに関する資料のすべてであるが、これらの古代の学説誌家たちにとってもピュタゴラスはほとんど伝説上の人物としてしか言及できなかったことがこれらの資料から判明する。プラトンやアリストテレスですらピュタゴラス学徒とピュタゴラスその人の思想を区別することはできなかった。ピュタゴラス哲学に言及するとき、アリストテレスは常に「ピュタゴラスの徒」の思想として語るのみで、ピュタゴラスその人の思想として語ったことは一度もない。ピュタゴラスの思想とピュタゴラス学徒の思想との間に明確な区別を画することは碩学アリストテレスにとっても不可能だったのである。このようにピュタゴラスはすでに古代において伝説であった。否、彼はすでにその生前において伝説であったということができよう。このようにピュタゴラスがその当初から伝説化した理由としては、ひとつにはピュタゴラスが後世から「ピュタゴラス教団」と呼ばれた宗教結社を自ら組織し、その教祖として深い帳の奥にその実像を隠したこと、しかもその教団においては沈黙が重要な戒律とされ、ポルフェリオスの報告によれば、それは尋常のものでなかったこと、またひとつにはその思想（教義）も魂の転生説や数の神秘思想などきわめて宗教的神秘主義的色彩の強いものであったこと、しかもピュタゴラスに著作があったとしても（あったとも、なかったともいわれている）、教団の奥義として秘匿されたこと、そして最後に教団がイタリアにおいて徹底的な迫害にあった結果、ほぼイタリアにおいて壊滅し、わずかな例外を除いて教団も学徒も根絶されてしまったことなどを挙げることができよう。しかしそれにもかかわらずその後のギリシア思想史の中にピュタゴラスの影響は実在したし、また実在しつづけた。とくにそのことはプラトンにおいて顕著である。魂の不死説、数形而上学への傾倒、観想的生活の推奨といった知的貴族主義など、プラトンにおけるピュタゴラス的要素を枚挙すればいとまがないが、あのアカデメイアにしてからがピュタゴラス主義の現実的な実践でなくて何であろうか。そしてプラトンを經由してその影響は今日のわれわれにまでも及んでいるのである。われわれが今日もなお「アカデミック」という語にながしかのものを感じ取ることができるとするなら、われわれはピュタゴラス精神を今日において感得しているのである。たしかにこの語はプラトンの学園アカデメイアに由来するが、そのアカデメイアの実体をなす精神はピュタゴラス的精神であったといわれており、これは深い歴史認識である。

それではピュタゴラスとは一体何者であったのか。その実像はどういうものであるのか。この問いはわれわれに彼に関する古代資料を直接探査するよう促すが、以下の資料が語るように、この探査によってもわれわれは彼の実像を取り出すことはできない。既述のごとく、すでに古代にあって彼は伝説だったからである。それでは彼の伝説が、換言すれば、彼の虚像が歴史にあればどの影響力を行使し、かつ行使しつづけているのであろうか。歴史とは常に皮肉であり、神秘で

ある。

さて以下の資料から少なくとも次の点は歴史的事実として語りえよう。

ピュタゴラスは小アジアのサモス島の市民であったが、その時のサモスの僭主であったポリュクラテスの暴政を嫌って、当時大ギリシアと呼ばれた南イタリアのクロトンに移住した。ポルフュリオスによれば、それは彼の40歳、言い換えれば最盛期の時期であったとのことであるが、これを文字通りにとる必要はないにしても、ほぼ彼がこの時代の人であったことは他の資料からしても間違いなからう。ところでポリュクラテスがサモスに在位したのは前533～522年のこととされているから、ピュタゴラスは前六世紀の後半に活躍した人物ということができる。

さてクロトンにおいてピュタゴラスは後世から「ピュタゴラス教団」と呼ばれることになった宗教的結社を創り、自らその教祖となり、直接間接に教団を指導した。この教団もほとんど謎であるが、それがオルフィック教の流れをくむ教団であって、魂の輪廻説を教義とし、輪廻の輪から魂を解脱させるために10の戒律のもとに規制された禁欲的な集団生活やさまざまな業を實踐する宗教団体であったことは確かである。ピュタゴラス学徒たちの考えによれば、身体は魂の墓であって（身体即墓説）、魂は人間や動物のさまざまな身体を輪廻転生するように運命づけられているのである。この輪廻の輪から魂を解放するためには、何よりもまず魂を浄化しなければならぬと彼らは考えた。そしてそのための手段としてピュタゴラス学徒たちは、一方ではアクウスマタと呼ばれる戒律を遵守する禁欲的な集団生活を實踐しつつ、他方では音楽と数学を研究したのである。この観想を内容とした精神主義的貴族主義的生活が後世から「ピュタゴラス的生活法」と呼ばれ、プラトンをはじめ、ギリシアの精神世界に多大の影響を及ぼしたことは哲学史の語るところである。そしてそれはまた、前述のごとく、さまざまな形をとって今日もなお生きつづけているのである。

さてクロトンにおいて教団は一時期かなりの政治的勢力となったが、ピュタゴラスのイタリア上陸から20年経過したのち、その知的貴族主義が災いして、キュロン一派から迫害を受けるようになった。ピュタゴラスはその晩年、メタポンティオンに退かざるをえなくなり、そこでその生涯を終えたようである。しかしピュタゴラス退去の後もキュロン一派のピュタゴラス学徒への迫害はやまず、ついに彼らはピュタゴラス学徒の集会所を焼き討ちし、そこに集っていたピュタゴラス学徒を、アルキッポスとリュシスを除いて、すべて焼殺するという暴挙にでた。そしてそれをのろしとして南イタリア全土でピュタゴラス教団への迫害がはじまり、イタリアにおけるピュタゴラス教団の学派としての活動は消滅したのである。しかし幸いなことにピュタゴラス精神そのものは上述のアルキッポスとリュシスによってギリシアの中央部に伝えられ、この後のギリシア精神史に深く刻み込まれるにいたったのである。

以上は学説誌家たちによって語られているピュタゴラスないしはピュタゴラス教団の外面史である。これらのことはほぼ歴史的事実と考えてよいであろう。

何度もいうが、ディールスによって収集された以下の資料はピュタゴラスその人について古代の学説誌家たちが伝えている報告のすべてである。これらの報告がピュタゴラスをほとんど伝説上の人物としてしか報告しえていないことにわれわれは驚かずにはおれないが、こうした伝説ないしは虚像を介してもなおわれわれはピュタゴラスの実像のなにがしかを感得するのではなからうか。ピュタゴラスはそれほど強力な人物であった。事実彼はプラトンやアリストテレスにと

っても伝説であったのであり、それにもかかわらず彼らの哲学に本質的な影響を及ぼしたのである。ピュタゴラスに関してはプラトンやアリストテレスもわれわれよりそれほど恵まれた立場にいたわけではない。彼はすでに生前において伝説だったからである。以下の資料によってもピュタゴラスの人格についてなおながしのかのものを感得することができると思ふ。出典はヘロドトス、ディオゲネス・ラエルティオス、イソクラテス、プラトン、アリストテレス、ポルフェリオス、プロクロス、アポロニオス、アエリアヌス、イアムブリコス、アレクサンドリアのクレメンス、ストラボン、アウルス・ゲリウス、ヒッポリュトス、ユスティヌス、ディオドロス、ポリュビオス、ピロデモス、ヨセフス、プルタルコス、ガレノス、アエティオスなどである。

Herod. II 123 (DK. 14, 1) また人間の魂は不死であり、身体が減ぶと次々に生まれてくる他の動物の中に入っていき、陸に棲むもの、海に棲むもの、空飛ぶもののすべてを一巡すると、新たに生まれてくる人間の身体の中にまた再び入っていき、3000年で魂は一巡するというこの説をはじめて唱えたのもエジプト人である。ギリシア人のなかには、先の者もあれば後の者もあるが、この説をあたかも自分のものであるかのように利用している者たちがいる。それらの者の名前をわたしは知っているが、ここには記さない。

Herod. II 81 (DK. 14, 1) しかしながら羊毛は少なくとも聖域には持ち込まれることはないし、また遺骸とともに埋葬されることもない。それは神の掟によって禁じられているのである。このことはいわゆるオルフィック教徒の教えともバックスの信徒（これはもともとエジプトのものである）のそれともピュタゴラスの徒のそれとも一致する。なぜならそれらの密儀にあずかった者が羊毛の衣装で葬られるのは禁じられているからである。これらのことについては聖なる伝承があるのである。

Herod. IV 95 (DK. 14, 2) わたしがヘレスポントスやポントスに住むギリシア人から聞き知ったところでは、このサルモクシスというのは人間であって、サモスで奴隷をし、ムネサルコスの子ピュタゴラスの奴隷であったとのことである。その後、彼は自由人となり、産をなし、資産家となって、自分の国に戻った。トラキア人たちは貧しい生活をし、いささか愚鈍であるが、このサルモクシスはギリシア人と交わり、またギリシア人の中でもっとも有力な学者ピュタゴラスのもとにあった者らしく、イオニアの生活様式に通暁し、トラキアにみられるよりも高度な習俗を身につけていた。それで彼は男部屋を用意し、そこに町の有力者たちを宿泊させ、饗応しながら、彼自身も彼の客も、また彼らから次々に生まれてくる者たちも、死ぬということはなく、永遠に生き永らえてあらゆる善きものを得る国に行くであろうと教えたという。上述のようなことを行い、またそのようなことを語る一方、彼は地下に部屋を造らせた。部屋が完成すると彼はトラキアの人々の間から姿を隠し、下の地下室に降りて3年間そこで暮らした。人々は彼を死んだものとして愛惜し、悼んだが、4年目に彼はトラキア人たちの前に姿を現し、こうしてサルモクシスが語ったことがトラキアの人々に信じられるところとなったとのことである。彼はこのようなことをしたとギリシア人たちはいう。しかしわたしはこの地下室のことを頭から信じないというわけでもないが、あまり信じてもない。このサルモクシスなる者はピュタゴラスよりもずっ

と前に存在した人物であるとわたしは考えるからである。

Diog. VIII 8 (DK. 14, 3) またアリストクセノスも、ピュタゴラスはその倫理的教説の大部分をデルポイの巫女のテミストクレアから得たという。

Isocr. Bus. 28 (DK. 14, 4) サモスのピュタゴラスもまたそういった人のひとりである。彼はエジプトに行ってその地の人々の弟子となり、他国の哲学をはじめてギリシア人にもたらした。そしてとくに犠牲や聖域における祭礼に関する事柄に他の人々より際立った熱意を示したが、それは、例えそのことによって神々から酬われるということはなくとも、少なくとも人々のもとでそのことからきわめて高い評価が得られようと考えてのことである。そしてまさにこのことが実際に彼の身に起こったのである。なぜなら年少の者はすべて彼の弟子になることを熱望するし、また年長の者も彼らの子供たちが家のことを気遣うよりも彼と一緒にいるのを見る方を喜ぶというほど、彼は名声の点で他の人々を凌駕したからである。そしてこのことは信じられないことではないのである。というのは今日においてもなお彼の弟子と称する者たちを人々は、彼らは沈黙したままであるのに、弁舌において最大の名声を博している人以上に賛美しているからである。

Diog. VIII 56 (DK. 14, 5) アルキダマスは『自然学者』の中で……彼〔エムペドクレス〕はアナクサゴラスとピュタゴラスの弟子であったといっている。すなわち一方とは生活と姿の荘重さを張り合い、他方とは自然学を張り合った。

Arist. Rhet. B 23. 1398 b 9 (DK. 14, 5) アルキダマスのいったこともまたその例である。「すべての人は知者を尊ぶ。例えばパロスの人々はアルキロコスを毒舌家ではあったが尊んだし、……またイタリア人たちはピュタゴラスを尊び、ラムプサコスの人々はアナクサゴラスを外国人ではあったが、埋葬し、今日もなお尊んでいる、云々。」

Diog. IX 38 (DK. 14, 6) 彼〔デモクリトス〕はピュタゴラス学徒の崇拜者であったとトラシユロスはいう。そのみならず彼は同名の著作においてピュタゴラスその人に言及し、彼を賛美しているのである。彼は一切をピュタゴラスから得ているように思われるのであって、もし年代上の事柄が妨げなかったなら、彼の弟子であったとすら考えられよう。しかしいづれにせよピュタゴラス学徒の誰かから彼は教わったのであって、このことは彼と同時代に生きたレギオンのグラウコスの語るどころである。

Porph. V. P. 3 (DK. 14, 6) サモスのドゥリスは『年代記』の第二巻において彼〔ピュタゴラス〕の子供としてアリムネストスを挙げ、彼はデモクリトスの先生であったといっている。アリムネストスは亡命から帰国して、直径が2ペーキュス近くもある青銅の献納物をヘラの神殿に奉納したが、それには次のような碑文が刻まれていたとのことである。

ピュタゴラスに愛されし息子のアリムネストスがわれを献納せり。

かの者はことばにおいて多くの知恵を見出せし者なり。

これをシモスが持ち去り、その音階上の基準を横領し、我がものとして発表した。そこには7つの知恵が刻まれていたが、シモスが盗み取ったひとつと共に献納物に刻まれていた他のものも消されてしまったとのことである。

Procl. in Eucl. 65, 11 Fr. (DK. 14, 6a) 彼〔タレス〕の後には詩人のステシコロスの兄弟のメルコスが幾何学の研究に手を染めた人として挙げられる。……彼らに続いてピュタゴラスがその原理を最初から調べなおし、定理を非物質的かつ知的に精査することによって、幾何学に関する哲学を自由人の教養たるにふさわしい形態に変えた。実際また彼が比例に関する理論体系や世界の諸形態の構成を発見したのである。

Aristot. Metaph. A 5. 986 a 29 (DK. 14, 7) なぜならピュタゴラスが老人であったとき、アルクマイオンは青年であったからである。

Apollon. Mirab. 6 (DK. 14, 7) ムネサルコスの息子のピュタゴラスがこれらの人につづくが、彼は最初こそ数学や数に関する事柄に力を注いでいたが、後にはペレキュデスの不思議な業も避けなくなった。というのはメタポンティオンに荷を積んだ船が入ってきたとき、そこに居合わせた人々は積み荷のことを思って無事に入港することを祈っていたが、彼は傍らに立って「その船が死体を運んでくるのを君たちは見ることになろう」といったからである。またアリストテレスのいうところによれば、カウロニアに白熊が現われるのを予告したとのことである。そしてその同じアリストテレスは、他にもまた多くのことを彼について書き記しているが、テュレニアで毒蛇が咬んだとき、彼は自らそれを咬んで殺したと述べている。またピュタゴラスの徒に争いが生じることを彼は予言したとのことである。それゆえ誰にも見られることなくメタポンティオンに去った。カサ河を渡ったとき他の人たちと共に「ピュタゴラス、ご機嫌よう」という超人的な大きな声を聞いた。その場にいた者たちは大いに恐れたという。彼はあるとき、同じ日、同じ時刻に、クロトンとメタポンティオンに現われた。またアリストテレスのいうところによれば、ある時彼は劇場に座っていたが、立ち上がって自分の腿が黄金であるのを一座の人々に示してみせたとのことである。

Aelian. V. H. II 26 (DK. 14, 7) ピュタゴラスはクロトンの人々によって北方のアポロンと呼ばれていたとアリストテレスは語っている。

Aelian. V. H. IV 17 (DK. 14, 7) ピュタゴラスは自分は死すべき本性のものよりすぐれた種から生まれたものであると人々に教えていた。……また彼はゴルディオスの子でプリュギア人のミダスであったことをクロトンのミュリアスに示唆した。そして白い鷲を撫でたが、鷲はそのままにしていた。

Iambl. V. P. 31 (DK. 14, 7) またアリストテレスも『ピュタゴラス哲学について』の中で次のような区分が人々によって重要な秘事として保持されていたと伝えている。理性的生きもののあ

るものは神であり、あるものは人間であり、あるものはピュタゴラスのごときものである。

Clem. Al. Strom. I 62 (DK. 14, 8) ところでムネサルコスの子ピュタゴラスは、ヒッポボトスのいうところによれば、サモスの人であるが、アリストクセノスが『ピュタゴラス伝』の中で、またアリストアルコスやテオポムポスのいうところによれば、テュレニアの人であった。しかしネアンテスによればシリア人かテュロス人である。したがって大多数の人によれば、ピュタゴラスは生まれという点では異国人〔非ギリシア人〕であることになる。

Diog. VIII 1 (DK. 14, 8) アリストクセノスによれば、彼〔ピュタゴラス〕はアテナイ人たちがテュレニア人たちを追い出して占領した島のひとつから出たテュレニア人であった。

Diog. I 118 (DK. 14, 8) アリストクセノスは『ピュタゴラスとその知人たち』において、彼〔ペレキュデス〕はデロス島で病死し、ピュタゴラスによって埋葬されたという。

Porph. V. P. 9 (DK. 14, 8) 彼は40歳になったとき、ポリュクラテスの僭主政治がますますひどくなって、自由人たる者その独裁と専制に耐ええなほどのものになったのを見て、かくてイタリアへの航海に踏みだしたとアリストクセノスはいっている。

Theol. Arithm. p. 40 Ast (DK. 14, 8) ピュタゴラス学徒で『前兆について』を書いたアンドロキュデス、ピュタゴラス学徒のエウブリデス、アリストクセノス、ヒッポボトス、それにネアンテスがその人のことを記録に留めているが、彼の場合の魂の転生は216年であったと彼らはいっている。とにかくそれだけの年の後、ピュタゴラスは再生に至り、あたかも6からなる魂の世代の立方体と球体によるその回帰の最初の一巡と帰還の後、それらによって別の生を得たかのように彼は生き返ったとのことである。このことはまた彼がエウボルボスの魂を得たということと少なくとも時間の上で一致する。なぜならトロイア戦争から自然学者クセノパネスやアナクレオンやポリュクラテスの時代まで、またメディアのハルパゴスによるイオニアの攻囲と破壊（ポキス人たちはそれを逃れてマッサリアに住み着いた）までほぼ514年であったと伝えられているからである。すなわちピュタゴラスはこれらの人たちすべてと同時代の人なのである。ところで彼はエジプト王と共にカムビュセスによって捕虜にされることを選び、その地で神官たちと共に過ごし、またバビロンにも付き従い、異国の秘儀を学んだと伝えられている。そしてそのカムビュセスはポリュクラテスの僭主政治と同時代者であった。このポリュクラテスの僭主政治を逃れてピュタゴラスはエジプトに行っていたのである。かくしてその周期の2倍（すなわち216年の2倍）を引き去れば、残りが彼の人生の82年となる。

Diog. VIII 4 (DK. 14, 8) 彼〔ピュタゴラス〕は自分について次のように語ったとポントスのヘラクレイデスはいう。すなわち彼はかつてアイタリデスとして生まれ、ヘルメスの息子とみなされていた。ヘルメスは彼に不死性以外であれば何でも望むものを選んでよいといった。そこで彼は生と死を通じて身に起こったすべての記憶を保持することを願ったという。そういうわけで

彼は生きているときにはすべてを思い出すことができるし、死んでも同じ記憶を保持しているのである。その後、時を経て彼はエウポルボスに入り、メネラオスによって殺害された。ところでこのエウポルボスは彼がかつてアイタリデスであり、ヘルメスから贈り物を得たこととその魂の巡りとを、すなわち魂がどのように巡って、どれだけの植物や動物にとり憑いたか、また魂がハデスでどれだけのことを体験し、他の魂はどのような目にあっているかを語ったとのことである。エウポルボスが死ぬと彼の魂はヘルモティモスに移った。このヘルモティモスもまたその証拠を示したいと思い、ブランキダイー族のもとに登ってアポロンの神殿に入り、メネラオスが奉納した盾をそれと指し示してみせたとのことである（なぜなら彼はメネラオスがトロイアから帰航するときアポロンに奉納したのはその盾であるといったからである）。盾はすでに朽ち果ててわずかに象牙の表を残すのみとなっていたのであるが。ヘルモティモスが死ぬと、彼はデロス島の漁師ピュロスとなった。そして再び彼は最初どのようにしてアイタリデスとなり、次にエウポルボスとなり、さらにヘルモティモスとなり、そしてピュロスとなったかをすべて思い出した。ピュロスが死んだ後ピュタゴラスとなったが、彼は上述のすべてを記憶しているという。

Porph. V. P. 18 (DK. 14, 8a) ディカイアルコスのいうところによれば、イタリアに降り立ち、クロトンに達するや、彼は、多くの旅をしてきた並々ならぬ男が、またその固有の本性に関しても運命によってよく備えられた男がやって来たとの印象をクロトン市に与えた（というのはその姿は上品で、背が高く、大変な優美さと、声、性格、その他すべてにわたっての折り目正さを彼は有していたからである）。その結果、彼はまず長老たちからなる行政官を多くの美しい弁論によって魅了し、さらには執政官たちに頼まれて若者たちに青年向きの助言を行なった。そのあと学校から群をなして集まってきた子供たちに語り、それから婦人たちに語った。そして婦人たちの集まりが彼によって組織されたとのことである。こういったことがあって後、彼の名声は次第に高まり、クロトン市そのものからも、近隣の異国の地域からも、彼は多くの弟子を得た。クロトン市からの弟子の中には男のみならず女も含まれており、少なくともその一人はテアノといい、その名は広く知られるようになった。また近隣地域からは多くの王や有力者を弟子として得た。ところで一座の人々に彼が何を語ったかは、誰も明確にいうことができない。というのは彼らのもとにおける沈黙は尋常のものでなかったからである。しかしほぼ次のようなことが一般に知られたものとなっている。第一に魂は不死であると彼はいう。次にそれは他の種類の生きものに転生する。さらにかつて生まれたものは一定の周期で再び生まれる。したがって何もかも絶対的に新しいということはない。したがって生命あるものとして生まれたものはすべて同族とみなさねばならない。すなわちこれらの教説をはじめてギリシアに導入したのはピュタゴラスであったと思われるのである。

Porph. V. P. 6 (DK. 14, 9) 彼〔ピュタゴラス〕の教えについていえば、大多数の人がいわゆる学問生たちの知識のあるものはエジプト人から、あるものはカルダイア人から、あるものはポイニケ人から学び取ったものであるという。なぜなら幾何学は昔からエジプト人が励んできたものであるし、数と計算に関することはポイニケ人が、天界に関する理論はカルダイア人が意を用いてきたからである。神々にかかわる祭礼とか、その他、生活上の諸々の流儀についてはマゴス

僧から聞き、取り入れたと人々はいう。そして前者のほとんどは覚書に書かれていたがゆえに多くの人が見とどけているが、あとの日々の生き方に関することは余りよく知られていない。ただエウドクソスが『地図の第七』においていうところによれば、少なくともそれだけの純潔はもちろんのこと、それ以外にも、生臭いものを控えたのみならず、屠殺人にも獵師にも決して近づかないというほど、殺生にかかわるものや殺生するものを避けることを守ったとのことである。

Strab. XV 716 (DK. 14, 9) ピュタゴラスもまたそういったことを語り、生臭いもの〔生命あるもの〕を控えるように命じたと彼〔オネシクリトス〕がいうと、云々。

Diog. VIII 20 (DK. 14, 9) 彼は犠牲として無生物を使用した。しかしある人々は雌鶏と乳離れする以前の仔山羊とハバリアスといわれているもの〔乳離れする前の仔豚〕だけは用いたが、羊は決して用いなかったという。けれどもアリストクセノスは、他のすべての生きものは食べることを容認したが、耕作用の牛と牡羊だけは控えるように命じたといっている。

Gell. XI 1 ff. (DK. 14, 9) (1) 哲学者ピュタゴラスは動物からなる料理を食べなかったし、またギリシア人がキュアモスと呼んでいる豆を忌避したという誤った見解が古くから支配的であり、有力であった。(2) この見解から詩人のカリマコスはこのように書いている。「豆から手を遠ざけよ。この有害な食物から。われもまたピュタゴラスが命じたごとく、そう語る。」……(4) しかし音楽家のアリストクセノスは（彼は哲学者アリストテレスの弟子であり、初期の文献に精通した人であるが）ピュタゴラスについて残した書物の中で、豆以上にピュタゴラスがよく使用した野菜はないといっている。というのはこの食物は知らぬ間にお腹をゆるめ、通じをよくするからである。(5) アリストクセノスのことばそのものをここに記しておく。「ピュタゴラスは豆類のなかでも特にキュアモス〔豆の一種〕をよしとした。というのはそれはお腹をなめらかにし、通じをよくする作用があるからである。それゆえまた彼はそれをもっとも多く使用した。」(6) また彼は小さい仔豚や柔らかな仔山羊を食べたとアリストクセノスは述べている。(7) このことをアリストクセノスは彼と親しかったピュタゴラス学徒のクセノピロスや、年齢の点でもっと年長の、ピュタゴラスの時代からまだそれほど隔たっていない時代に生きていた他の誰かから聞き知ったものと思われる。……(12) 「子宮や心臓やいそぎんちゃくといったようなものはピュタゴラス学徒は控えたが、その他のものは使用したとアリストテレスはいっている。」

Plat. de rep. X 600A (DK. 14, 10) それでは、公的にはないとするなら、私的な面でホメロスがその生存中に誰かに対してその教育の指導者となり、それらの人々がその交わりのゆえに彼を敬愛したというようなことがあるであろうか。そしてまたホメロスの生活の方途といったものを後の人々に伝えたというようなことが語られているであろうか。ちょうどピュタゴラスが彼自身もそのことで特別に敬愛されているし、またその後継者たちもピュタゴラス的生活法と彼らが呼ぶものを今日もなお守って、他の人々の中にあってもどこか輝いて見えるように。

Diog. VIII 45-46 (DK. 14, 10) 彼〔ピュタゴラス〕は第60オリュンピア祭年^{アクメー}に最盛期であった。

そしてその学校は9ないし10世代後まで続いた。なぜならトラキアのカルキデケー出身のクセノピロス、プレイウスのパントン、それにエケクラテス、ディオクレス、ポリュムマストス（彼らもまたプレイウスの人である）らが最後のピュタゴラスの徒だからであり、アリストクセノスも彼らを目撃しているからである。彼らはピロラオスとタラスのエウリュトスの弟子であった。

Hippol. Ref. I 2, 12 (DK. 14, 11, Dox. gr. 557) ピュタゴラスはカルダイアのツァラタス〔ゾロアスター〕のもとに行ったことがあるとエレクトリアのディオドロスと音楽家のアリストクセノスという。

Diog. VIII 14 (DK. 14, 12) 音楽家のアリストクセノスのいうところによれば、彼はまた尺度と秤をギリシアに導入した最初の人であった。

Porph. V. P. 22 (DK. 14, 12) アリストクセノスのいうところによれば、ルカニア人もメッサピア人もペウケティア人もローマ人も彼のところにやって来たとのことである。

Porph. V. P. 4 (DK. 14, 13) だが他の人々はクレタの一族ピュトナクス族の女テアノからピュタゴラスは息子のテラウゲスと娘のミュイアを得たと記録しており、ある人々はアリグノテーも得たとしている（ピュタゴラス派の諸著作も彼らの名前を留めている）。ピュタゴラスの娘は、娘時代にはクロトンの娘たちを指導し、女となってからは女たちを指導したとティマイオスは伝えている。そしてクロトンの人々はその家をデメテルの神殿とし、前庭をムセイオンと呼んだとのことである。

Iambl. V. P. 170 (DK. 14, 13) 彼は彼から生まれた娘を嫁がせた。その後彼女はクロトン人のメノンと一緒に暮らしたが、娘時代にはその地の娘たちを指導し、女となってからは女としてはじめて講壇に立つというような暮らしをしたとのことである。ところでメタポンティオンの人々はなおもピュタゴラスのことを記憶に留め、彼の家をデメテルの神殿とし、前庭をムセイオンとした。

Justin. 20, 4 (DK. 14, 13) 20年間クロトンで暮らしたのち、ピュタゴラスはメタポンティオンに移住し、そこで没した。人々の彼に対する賛美の念は彼の家を神殿にしたほどであった。

Diod. XII 9, 2 ff. (DK. 14, 14) ところで彼ら〔シュバリス人〕のもとではテュリスが扇動者となって有力者たちを告発し、市民の中のもっとも裕福な人々500人を追放し、その財産を没収するようにシュバリスの人々を説き伏せた。(3) 亡命者たちはクロトンに逃れて、アゴラにあった祭壇のところに逃げ込んだ。そこでテュリスはクロトン人のもとに使節を派遣して、亡命者たちを引き渡すか戦争を待つかどちらかを選ぶよう言い渡した。(4) それで集会が召集され、嘆願者たちをシュバリス人に引き渡すべきか、それとも自分たちより有力なものとの戦争に立ち向かうべきかが協議されたが、評議会も民会も困惑し、最初は大多数の意見が戦争を理由として嘆願者

引き渡しの方に傾いた。しかしその後、哲学者のピュタゴラスが嘆願者たちを救助するよう忠告すると、彼らは意見を変え、嘆願者救助のための戦争を再び取ったのである。(5) シュバリス軍が30万を以て彼らに向かって進軍して来たとき、クロトンの人々は競技者ミロンを指揮官とし、10万でこれに立ち向かい、まず最初にミロンがその体力の傑出によって彼と対陣した者たちを圧倒し去った。(6) なぜならこの人はオリュムピア競技で6度も優勝しことがあり、またその体にふさわしい勇気の持ち主であったが、その彼がオリュムピア競技の月桂冠を戴き、ライオンの毛皮と棍棒といったヘラクレスの出で立ちで戦場に出向いてきたといわれているからである。それで彼が勝利の原因であったとして市民たちから賛美されたとのことである(10, 1)。クロトンの人々は怒りのために一人も生け捕ることを欲さず、敗走中に手中に落ちた者はすべて殺したので、その結果、大多数を殺戮することとなった。そしてさらにそのポリスを掠奪し、これを完全に荒廃せしめた。

Iambl. V. P. 260 (DK. 14, 14) [シュバリスの] 1万人のうち30人がテトライス〔トライスか〕付近で生き残った。

Diog. II 46 (DK. 14, 15) アリストテレスが『創作術について』第3巻においていうところによれば、彼〔ソクラテス〕にはレムノスのアンティロコスとか占い師のアンティポンといった競争者がいたが、それはピュタゴラスにキュロンやオナタスがいたのと同様である。

Iambl. V. P. 248 ff. (DK. 14, 16) ところでピュタゴラスが不在であったときに陰謀が企てられたという点についてはすべての人が一致して認めているが、その時の旅先については意見を異にしている。すなわちある人はシュロスのペレキュデスのところへ行っていたといい、ある人はメタポンティオンへであるといっているからである。陰謀の原因は多く語られているが、そのひとつはキュロン一派といわれている人々によってなされた次のようなものである。クロトン人キュロンは生まれと名声と富においては市民中第一人者であったが、しかし性格が激しく、暴力的で、喧噪を好み、専制的であった。その彼がピュタゴラスの徒の生活に加わりたとの熱意を熱心に示すようになり、すでに老人であったピュタゴラスその人のところにやって来たが、上に述べたような理由のゆえにその資格なしとされた(249)。そういうことがあって、彼と彼の仲間たちはピュタゴラスその人とその仲間の人々に対して激しい戦を始めるにいたったのである。キュロンと彼の側に立った者たちの競争心は激しく強烈で、〔その迫害が〕最後のピュタゴラスの徒にまで及んだほどである。したがってそのことが原因でピュタゴラスはメタポンティオンに退き、そこで生を終えたといわれている。だがキュロンの徒といわれた人々のピュタゴラス学徒に対する迫害はなおもやまず、彼らはありとあらゆる敵意を示しつづけた。しかしそれでもある時点まではピュタゴラスの徒の善美と国々の彼らを望む気持ちの方が勝っていて、彼らによって国事が治められることを人々は望んでいた。しかしついに彼らのピュタゴラス学徒に対する陰謀は、ピュタゴラスの徒がクロトンのミロンの家で会議を持ち、国事について協議していたとき、その家に火をつけ、アルキッポスとリュシスの二人を除いたその場の人々のすべてを焼き殺すというまでになったのである。この二人はきわめて若く、かつ強健であったので、なんとかその場を脱出す

ることができた（250）。このようなことがあったにもかかわらず、どのポリスも起こった事件について一言も問題にしなかったので、ピュタゴラスの徒は〔ポリスの〕世話をやめた。各ポリスの無関心（というのはあれほどの事件であったにもかかわらず、彼らはそれに対して何の関心も示さなかったからである）ともっとも指導的な人々の死亡という双方の理由によってそういうことになったのである。生き残った二人のうち（両者ともタラスの人であったが）、アルキッポスはタラスに戻り、リュシスは無関心を憎んでヘラスに旅立った。そして〔当初〕ペロポネソスのアカイアで時を過ごしたが、その後ある争いが生じて、ティーバイに移住した。そしてまさにこの人の弟子にエパメイノンダスはなったのであって、エパメイノンダスはリュシスのことを父と呼んだとのことである。このようにして彼もまたその生涯を終えた（251）。生き残ったピュタゴラス学徒たちはレギオンに集まり、その地で相共に暮らした。しかし時が経過し、国政がますます悪い方向に進んでいったので、タラスのアルキッポスを除いて、人々はイタリアの地を離れた。パントン、エケクラテス、ポリュムナストス、ディオクレス（以上はプレイウスの人）、それにトラキアのカルキディケー出身のカルキス人クセノピロスといったところが主な人々である。ところで彼らは、学派は絶えていたが、草創期以来の習慣と学問をその生を終えるまで立派に守りつづけたのである。以上はアリストクセノスの述べるところである。ニコマコスも他の点はこれと同じことを語っているが、ただその陰謀事件があったのはピュタゴラスが外国旅行から帰ってからであるとしている。

Porph. V. P. 56 (DK. 14, 16) デイカイアルコスやより厳密な人々も、ピュタゴラスもまた陰謀の場に居合わせたといっている。

Polyb. II 38, 10 ff. (DK. 14, 16) ところで今述べたような政策上の諸特徴や国政の特徴点は以前にもアカイア人のもとに存在した。…… (39) (1)なぜならそれを機に、当時大ギリシアと呼ばれていたイタリアの各地において人々はピュタゴラスの徒の集会所を焼き討ちしたが、(2)それにつづいて国政に関する全面的な改変運動が起こったからである（各ポリスから第一流の人々があのように数えられぬほど殺害されたのだから、このことは当然のことである）。その結果それらの地域のギリシアの各ポリスは殺戮、内紛、ありとあらゆる種類の騒動で満たされることとなった。……(4)その折にギリシアのきわめて多くの地域から問題解決のために使節が派遣され、当面する災禍を終息させるために彼らはアカイア人とその保証を利用したのである。

著 作 教 説

Philod. de piet. p. 66, 4 b 3 Gomp. (DK. 14, 17) かの3巻を除けば、彼に帰されているものいずれもピュタゴラス自身のものではないと人々はいう。

Iambl. V. P. 199 (DK. 14, 17) 警戒の嚴重さにもまた驚かされる。というのはピロラオスの時代にいたるまで、あれだけの世代にわたる年月のあいだ、誰一人としてピュタゴラスの覚書の一つにも巡り合った者はいなかったからである。しかしこのピロラオスがはじめて世間の口にのぼ

っていたその3巻を公にしたのであって、それをシュラクサイのディオオンが、ピロラオスがひどい貧乏に陥ったとき、プラトンの勧めによって100ムナで買い取ったといわれている。というのはピロラオス自身ピュタゴラスの徒の一族から出た人であって、そのゆえに幾巻かを譲り受けていたからである。

Joseph. c. Ap. I 163 (DK. 14, 18) ところで彼〔ピュタゴラス〕については一つの著作もなかったと一致していわれている。しかし多くの人が彼について伝えており、その中でももっともよく知られた人はヘルミッポスである。

Plut. Alex. fort. I 4 p. 328 (DK. 14, 18) ピュタゴラスですら何も書かなかったし、ソクラテスもまた書かなかったし、アルケシラオスも書かなかったし、カルネアデスも書かなかった。

Gal. de plac. Hipp. et Plat. 459 Müll. (DK. 14, 18) ピュタゴラス自身の著作はひとつもわれわれに伝えられていないが、彼の弟子の二三の人が書き残しているものから推測して、ピュタゴラスもまたそう説いていたとポセイドニオスはいう。

Diog. VIII 6 (DK. 14, 19) ところでピュタゴラスは一冊も著作を残さなかったといっている人々もいるが、それは冗談である。少なくとも自然学者のヘラクレイトスはほとんど叫ばんばかりに次のようにいっている。「ムネサルコスの子ピュタゴラスはすべての人の中でもっとも研究に励んだ。そしてそれらの著書を選び出して自分の知恵としたが、博識、まやかしにすぎぬ。」彼がこのようにいったのは、けだしピュタゴラスがその著『自然論』を開始するに当たって次のように語っているからである。「わたしが呼吸する空気、わたしが飲む水に誓って、わたしは断じてこの論について非難を甘受することはないであろう。」「教育論』『政治論』『自然論』の三著はピュタゴラスによって書かれたものである。(7)しかしピュタゴラスのものとして世間に流布しているものは、ティーバイに逃れてエバメイノンダスを教えたピュタゴラスの徒、タラスのリュシスのものである。サラピオンの子ヘラクレイデスは『ソティオン綱要』において、彼〔ピュタゴラス〕はまた『宇宙について』を叙事詩の形で書いたという。それからさらに『聖なる論』を書いたが、その冒頭は「おお若者よ、静粛を以て以下のすべてを敬うべし」であった。第三に『魂について』、第四に『敬虔について』、第五に『コスのエピカルモスの父ヘロタレス』、第六に『クロトン』などを書いた。『密儀論』はヒッパソスのものであって、ピュタゴラスを中傷するために書かれたものであるとヘラクレイデスはいう。またクロトンのアストンによって書かれた多くのものがピュタゴラスに帰されているとのことである。

Diog. IX 23 (DK. 14, 20) パボリノスが『回想記』第五巻においていうところによれば、彼〔パルメニデス〕は宵の明星と明けの明星とが同じものであることを発見した最初の人であったように思われる。だが他の人々は、それはピュタゴラスであるとしている。

Aät. II 1, 1 (DK. 14, 21. Dox. gr. 327, 8) 宇宙全体を包むものを、その内に存する秩序から「コスモス」と呼んだ最初の人ピュタゴラスである。